

森六社長

黒瀬 直樹 氏

経営の こころ

3

現場を見て、話を聞く



くろせ・なおき 88年(昭63)埼玉県立川越工業高卒、同年森六入社。18年森六テクノロジー執行役員。22年森六ホールディングス(現森六)執行役員、23年常務執行役員。東京都出身、55歳。

「今に満足しては足をすくわれる。常に勉強しながらやっていかないとけない。現場で何が起きているのか。立ち位置を知るために現場を見ることが重要」と森六の黒瀬直樹社長は語る。森六は1663年(寛文3年)に染色用の藍と肥料の販売で創業し、自動車用内外装部品などを手がける現在まで300年におよぶ歴史がある。時代のニーズを先取りし社会から必要とされる企業であり続けてきた。脈々と受け継がれる挑戦のDNAで新たな価値を創造してきた。大事にしてきたのは顧客第一の思いだ。「顧客が何を求めているのか。それを実践できる

会社なのか」を追求。「経営とは企業の方向性を決め、意思決定をすること」とする。組織を組み立て、人を集めて育て、目標達成に全力で立ち向かうのが経営者だ。「本を読み、誰かに教わるのとや誰かに心酔したとかではない。さまざまな人の言葉を聞き、納得できることを指南として実践してきた。話をしている間に体に染みついてきた。特定の人から教えるをもらったというよりも、いろんな人が先生だった」と振り返る。経営者としての原点は北米で

周囲の言葉を指南として実践



の事業統括だ。「元々は開発職の人間だった。モノを作る会社を統括し業績の責任を負う。それぞれ会社に社長がいて、経営の経験では自分よりも先輩だった。日本の本社とも相談して末ねていく。口だけではダメで現場に入りながら、起きていること、困っていること、どこが強くてどこが弱いのか。しっかりと現場で見ることをやってきた」と振り返る。

「現場から学びがあり、情報やヒントが入ってくる。だから話しかけづらいというのはもったいない。フラットな感じのトップでありたい」という。他の役員らと席を並べ、社内や拠点を回る。風通しの良い職場を自ら実践する。「意思決定をするのが経営の仕事。知ってしまうがゆえに判断する際に感情を抑え殺さないといけないこともあった」と強調する。



新価値創出は同社のテーマだ。2024年7月に新たな会議体である経営会議を新設し、持ち株会社と事業会社間で経営視点から情報交換や連携を密にしてきた。組織を一体化し案件発掘や新価値創出を加速する。「森六は長年続くブランドで、顧客に認知されている。社名が元に戻ったと思われのかもしれないが新たな価値を創出する点で進化すると強調する。激しい変わり目にある自動車業界で新しい価値創造で時代を切り開いていく。(編集委員・村上毅)

挑戦するDNAで新たな価値を創出(環境にやさしい材料を適用したサステナブル加飾)を手がける森六テクノロジーと化学品専門の森六ケミカルスを吸収合併し、社名を森六ホールディングスから森六に変更した。「各事業がしっかりと稼げるよう意思決定を迅速化するが狙いで一定の成果はあった。今の時代では一つになり新たな価値を生み出す必要がある」。